

# 市 原 市 平 蔵 城 跡

— 国道297号(平蔵地区)道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 —

平成20年1月

千葉県県土整備部  
財団法人 千葉県教育振興財団

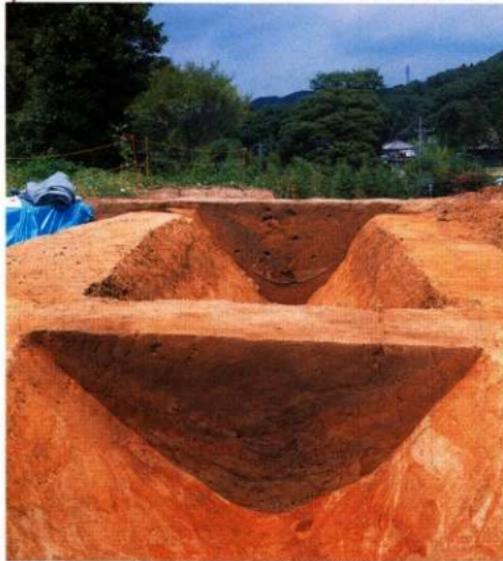
# いち はら し へい ぞう じょう き 跡

— 国道297号(平蔵地区)道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 —





1. SD002 完掘状況（南から）



2. SD002 B - B' 断面（南から）



3. SD002 A - A' 断面（南から）



4. SD002 南端東壁遺物出土状況（西から）

## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第588集として、千葉県県土整備部の国道297号（平蔵地区）道路改良事業に伴って実施した市原市平蔵城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世平蔵城に関連する堀が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年1月

財団法人千葉県教育振興財団  
理事長 福島義弘

## 凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による国道297号（平蔵地区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市原市平蔵1321-1ほかに所在する平蔵城跡（遺跡コード 219-090）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財團法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査から整理作業、本書の執筆・編集に至るまで、上席研究員 半澤幹雄が担当し、実施期間等は本文中に記載した。
- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所鶴舞出張所、市原市教育委員会の御指導・御協力を得た。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 市原市発行 1/2,500地形図「市原市基本図 P-9」の一部を1/2に縮小して使用した。
  - 第2図 国土地理院発行 1/50,000地形図「姉崎」「大多喜」の一部を合成して使用した。
- 7 調査地周辺の地形測量図は有限会社無限測量に委託して作成したものである。
- 8 調査地周辺の航空写真（図版1-1）は、京葉測量株式会社が昭和42年3月に撮影したものを1×10,000に拡大して使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針はすべて座標北である。測量値については、道路改良工事設計図面等との整合性をはかるために日本測地系を使用した。なお、世界測地系に基づく数値は下表のとおりである。下表の数値は「Web版 TKY2JGD Ver.1.3.79」により、パラメーターは「関東.par Ver.2.1.1」を使用した。
- 10 土層の色調の表記及び土器類の色調の表記に当たっては、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』2002年版 日本色研事業株式会社 を参考にした。
- 11 復元実測が困難な土器については、断面図に内・外面の拓本を必要に応じ掲載したが、断面図は右側が外面となることを原則とし、右に外面、左に内面を配した。
- 12 掘図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、各図に示したとおりである。

		1A - 00(基点)	2C - 00(調査区北西端)	5D - 00(SD002北西端)
日本測地系 (旧日本測地系) (Tokyo Datum)	X座標	-73,500.000m	-73,520.000m	-73,580.000m
	Y座標	33,900.000m	33,940.000m	33,960.000m
	北緯	35° 20' 12.64106"	35° 20' 11.98709"	35° 20' 10.03740"
	東経	140° 12' 22.68115"	140° 12' 24.26242"	140° 12' 25.04558"
世界測地系 (日本測地系2000) (JGD2000)	X座標	-73,144.1769m	-73,164.1773m	-73,224.1748m
	Y座標	33,606.3348m	33,646.3328m	33,666.3306m
	北緯	35° 20' 24.47695"	35° 20' 23.82308"	35° 20' 21.87370"
	東経	140° 12' 10.94502"	140° 12' 12.52611"	140° 12' 13.30920"

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	2
1 遺跡の位置と地理的環境.....	2
2 遺跡周辺の歴史的環境.....	2
第3節 調査の概要.....	4
1 調査の経過.....	4
2 調査の方法.....	4
3 基本層序.....	7
第2章 検出された遺構と遺物.....	8
第1節 遺構.....	8
1 堀・溝.....	8
2 掘立柱建物跡.....	11
3 土坑.....	13
第2節 遺物.....	14
1 土器.....	14
2 銭貨.....	14
3 石製品・石器.....	14
第3章 まとめ.....	17
報告書抄録 .....	卷末

## 挿図目次

第1図 調査区と周辺地形及び字名	1	第8図 SB001, SB002, SK003 平面・断面図	12
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第9図 SK001, SK002 平面・断面図	13
第3図 調査区周辺地形測量図	5	第10図 土器	15
第4図 トレンチ・本調査区と調査区縦断面図	6	第11図 錢貨	15
第5図 本調査区遺構分布図	9	第12図 石製品・石器	15
第6図 本調査区中心部遺構平面図	10	第13図 平蔵城根小屋部復元概念図	18
第7図 堀・溝断面図	11		

## 表目次

第1表 掘載土器観察表	16
第2表 掘載錢貨観察表	16
第3表 掘載石製品・石器観察表	16

## 図版目次

### 巻頭図版

- SD002 完掘状況（南から）
- SD002 B - B' 断面（南から）
- SD002 A - A' 断面（南から）
- SD002 南端東壁遺物出土状況（西から）

### 図版1

- 調査地周辺の航空写真

### 図版2

- 調査前遠景（北から）
- 調査前遠景（南から）
- 本調査区南半部調査前風景（南西から）
- 本調査区南半部完掘状況（南西から）

### 図版3

- SD002 完掘状況（北東から）
- SD001~004 完掘状況（南から）

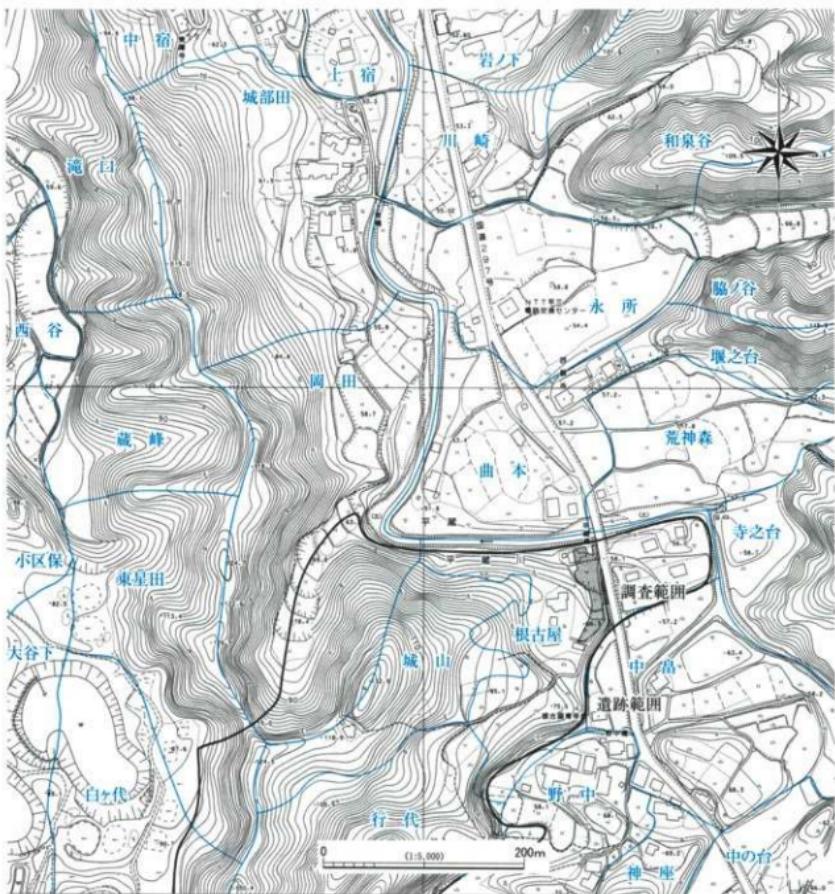
- |     |                          |
|-----|--------------------------|
| 図版4 | 1. SB001 完掘状況（東から）       |
|     | 2. SB002 完掘状況（北から）       |
|     | 3. SD001 C - C' 断面（南東から） |
| 図版5 | 1. SD003 D - D' 断面（東から）  |
|     | 2. SD004 A - A' 断面（南から）  |

- |     |                     |
|-----|---------------------|
| 図版6 | 3. 2 トレンチ完掘状況（北から）  |
|     | 4. 2 トレンチ上半断面（北東から） |
|     | 5. 4 トレンチ完掘状況（北から）  |
|     | 6. 4 トレンチ上半断面（北東から） |
| 1.  | SK001 完掘状況（北西から）    |
| 2.  | SK002 完掘状況（北西から）    |
| 3.  | 出土遺物                |

第1章 は じ め に

## 第1節 調査に至る経緯（第1図）

千葉県は市原市平蔵地区における国道297号線平蔵橋の架け替え事業の開始にあたって、埋蔵文化財の有無と取扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、平蔵城跡が所在する範囲に今回の工区が展開することがわかった。その後、取扱いについて慎重な協議を重ねた結果、事業計画の変更が困難なため、記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財團法人千葉県教育振興財團に委託されることとなった。



### 第1図 調査区と周辺地形及び字名

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境（第1・2図）

平蔵城跡の所在する市原市は、東京湾を望む房総半島中央部に位置する。市域中心は養老川の源流から河口までの流域を包括し、北部は村田川の上・中流域と下流域左岸にあたる。遺跡の所在する市原市平蔵は、養老川の支流である平蔵川の上流域に位置する。平蔵川は房総丘陵北半、上総丘陵南部と上総丘陵東部の境目を南東から北西に流れる<sup>1)</sup>。

平蔵城跡は平蔵川左岸の丘陵、上総丘陵南部東縁辺の標高130mの山塊頂部から標高56mの裾部にかけて展開する。房総丘陵は巌岡山地の標高408mの愛宕山を最高地点として東西に隆起帯が形成されている。隆起帯の北側は北北西に緩やかに傾く単斜構造の地層が厚く堆積し、浸食により山稜と凹所が鋸歯状に連続するケスタ状地形が養老川や小櫃川の上中流域を中心に形成されている。今回の調査地も南側が切り立ち、北側が緩やかな斜面を形成しており、平蔵城がこの地域特有の地形環境を有効に利用したものとみることも可能であろう。

### 2 遺跡周辺の歴史的環境（第2図）

平蔵城跡（1）について地元の伝承では、承平年中（931～937）に土橋平蔵政常が城郭を構え近郷七堀を領したのをその始まりとし、戦国時代に落城して現在の長南町蔵持に逃れたとされる<sup>2)</sup>。平蔵城跡の北、平蔵川の対岸の丘陵先端には国指定重要文化財西願寺阿弥陀堂（8）が位置する。西願寺阿弥陀堂は外陣尾垂木剥形裏面に記載された墨書銘により、明応年間（15世紀末葉）の建造であることが明らかであり、縁起によれば平蔵城主平將常により建立されたとされる<sup>3)</sup>。また、平蔵城跡は從来の研究では応永25年（1418）に上杉禪秀方の与党が蜂起した上総一本一揆の本拠とされる平三城（平之城とする説もある）に比定する考えもある<sup>4)</sup>。近年、平蔵城跡の北約50mの丘陵上にも中世城跡が確認され、城部田城跡（2）と呼ばれている。繩張図等から比較が試みられており、平蔵城跡を15世紀後半～16世紀初め、城部田城跡を16世紀後葉の城と捉えている。城主については決定的な史料が見いだせないとしながらも前者を西願寺阿弥陀堂の墨書銘から土橋氏、後者を勝浦市恵日寺の天正15年（1587）5月6日付里見義頼知行充行目録から江沢兵庫助という里見氏に従った土豪の可能性を指摘している<sup>5)</sup>。

周辺の城跡<sup>6)</sup>に目を転じると、平蔵城跡の南東約7kmには大多喜城跡（3）が位置している。大多喜城は武田氏、正木氏の居城として著名であり、大永元年（1521）頃、上総武田氏により築城され、天文13年（1544）から天文23年（1554）頃に里見氏の重臣正木氏が武田氏に代わり入城したとされる。北北西約6kmには池和田合戦の舞台となった池和田城跡（4）が位置している。池和田城は周辺地域を支配した多賀氏の居城であり、永禄8年（1565）に北条氏政率いる北条軍に攻められ落城している。西約5km、養老川本流の上流域右岸には大羽根城跡（5）が位置している。標高約110mの丘陵上に位置する大羽根城は戦国時代末期（16世紀後半）の上総南部の丘陵城郭の到達点を示すものと評価されている。里見氏の直接支配の中で地域支配の拠点及び境目城として築城されたものと考えられており、里見方の同時期の城と考えられている城部田城跡の性格を考える上で重要な城跡である。その他の周辺の中世城跡として、地域の土豪の居城と考えられている百尾城跡（6）や吉沢城跡（7）が挙げられる。

以上のように平蔵城跡周辺の歴史的環境について戦国時代を中心に概観したが、戦国時代末期には小田原北条氏と安房里見氏の攻防の地であったものと思われ、本城跡にもその影響は少なからずあったものと判断される。



1 平蔵城跡 2 城部田城跡 3 大多喜城跡 4 池和田城跡 5 大羽根城跡 6 百尾城跡 7 吉沢城跡 8 西願寺阿弥陀堂

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

### 第3節 調査の概要

#### 1 調査の経過

平蔵城跡の発掘調査および整理作業は平成19年度に実施し、同年度中に報告書を刊行した。発掘調査から整理作業・報告書刊行にいたるまでの調査組織及び担当者は以下のとおりである。

期 間	平成19年8月1日～平成19年8月31日（発掘） 平成19年10月1日～平成19年10月31日（整理）
組 織	調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 西川博孝 担当職員 上席研究員 半澤幹雄
内 容	発掘 準備・設営・環境整備・測量・トレンチ・表土除去・遺構等検出・精査・実測・撮影・遺物取上げ・資料整理 整理 水洗・注記・記録整理・分類・接合・実測・トレース・拓本・撮影・挿図・図版・原稿・編集・校正・刊行

#### 2 調査の方法

##### （1） 地形測量（第3図）

地形測量は業者委託とし、千葉県県土整備部で作成した道路設計図を参考に光波測距儀による地形測量を実施した。平坦面の範囲についても地形測量の中で実施した。

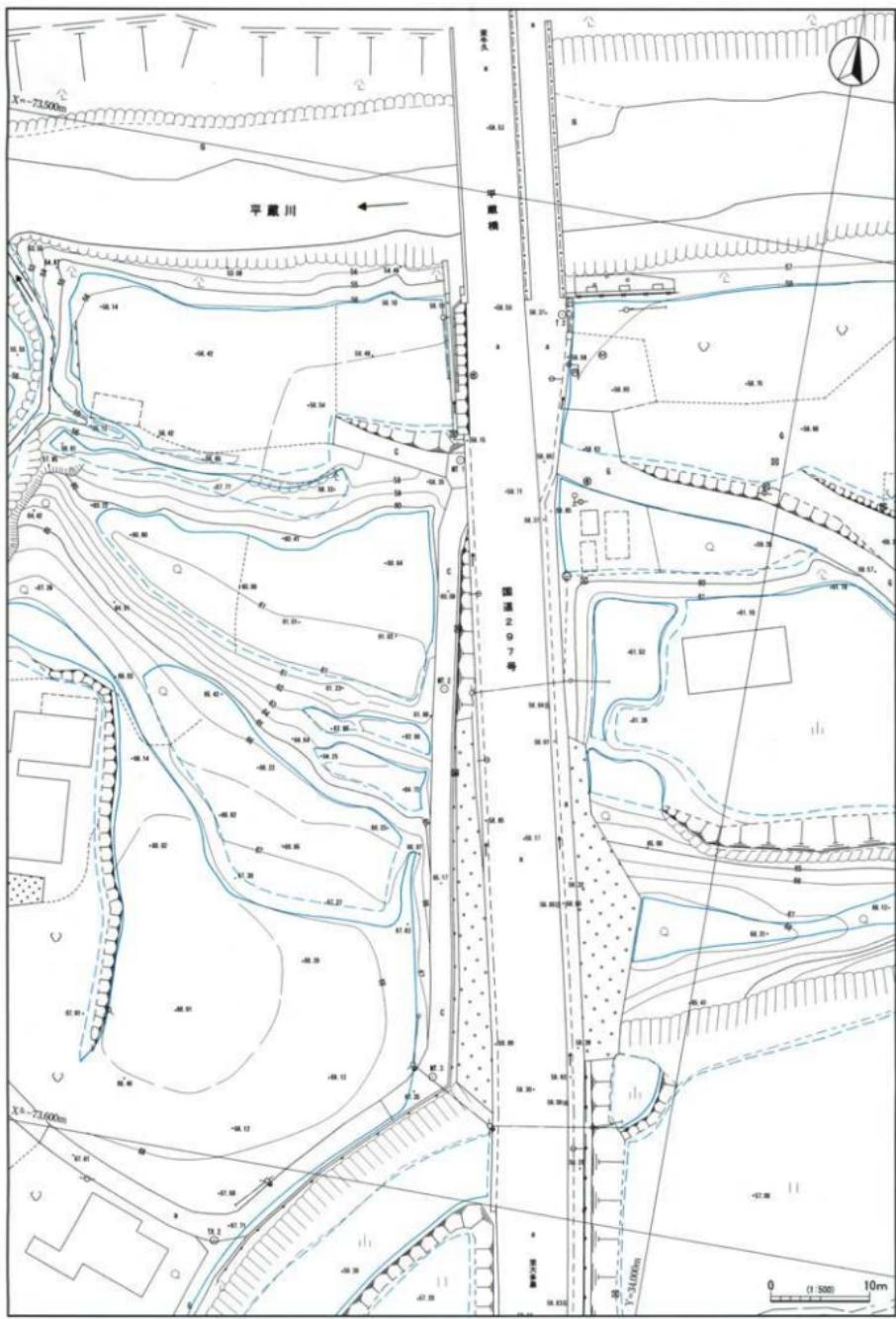
##### （2） グリッド設定（第4図）

発掘調査開始にあたり、根小屋部を包括すると判断される範囲に公共座標に基づいたグリッド設定を行った。グリッド設定は20m×20mを大グリッドとし、さらにその中に2m×2mの小グリッドを設定した。大グリッドはX = -73,500m、Y = 33,900mを起点とし、南に1、2、3…、東にA、B、C…とし、1A、2B、3Cと表記し、小グリッドは北西隅を00として、東に00、01、02…と1の位を増し、南に00、10、20…と10の位を増し、00～99の小グリッドを設定した。これにより、各グリッドは1A-00などと表記し、同時に北西隅の座標点を意味することとした。

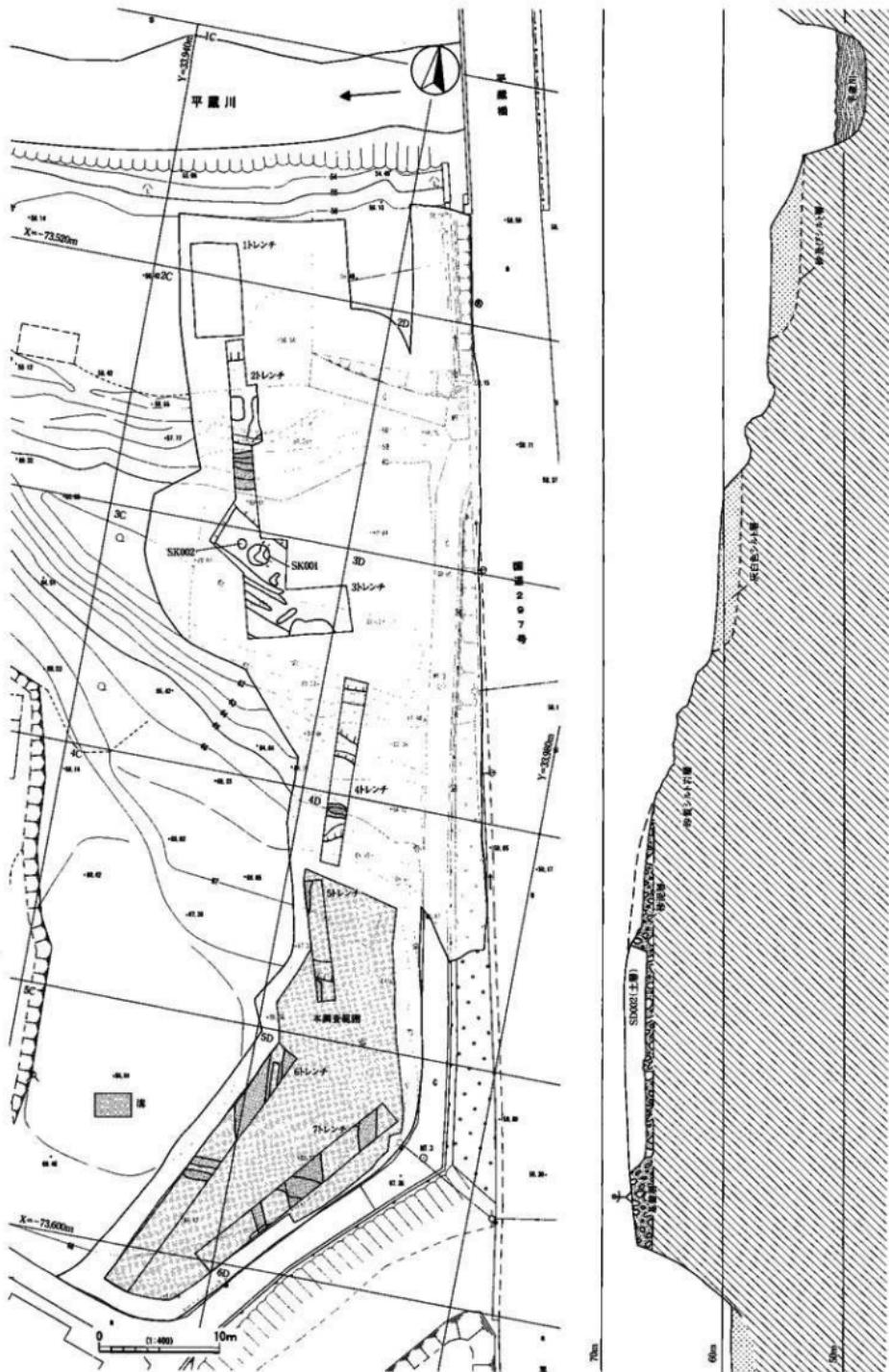
##### （3） 確認調査（第4図）

調査区は東西に延びる丘陵先端を南北に横切り、南端の平坦面が標高約68mと調査区内の最高所となり、北側の緩斜面には広い平場と狭い平場が階段状をなして遺跡の北側を東から西に流れる平蔵川に至る。

確認トレンチは3か所の平坦面とその間の斜面に概ね等高線と直交方向に設定した。これによりトレンチは南北方向を主体として7本を設定し、その結果確認調査の面積は242m<sup>2</sup>となった。平蔵川に面する下位平坦面は1トレンチの調査所見から近世以降の河川堆積及び整地である可能性が高いものと判断された。中位平坦面の2・3トレンチでは土坑と溝を検出したため一部を拡張して調査した。上部の狭小な平坦面に設定した4トレンチでは溝を検出したが、2トレンチ斜面の狭小な平坦面で検出した溝と同様に近世以降の所産と判断されたため確認調査で終了した。上位平坦面を中心に設定した5～7トレンチでは3m幅の堀や溝がまとめて検出されたためこの部分について本調査を実施することとした。



第3図 調査区周辺地形測量図



第4図 トレンチ・本調査区と調査区縦断面図

#### (4) 本調査（第4図）

本調査の対象となった上位平坦面を中心とする部分の面積は515m<sup>2</sup>である。本調査は当初、SD002場の東側まで表土除去を実施し、SD001・SD003溝から精査を行った。続いてSD002に南北2条の土層用ベルトを設定し精査を実施した。精査の進捗に伴い堀内埋土が多量の排土となるため、確認調査が終了した北側の中位・下位平坦面を排土場とし重機により運搬した。SD002の精査は当初上部（新段階）底面を床面としていたが、北端部の精査でさらに下層に及ぶことが判明したため北側土層用ベルト（A-A'断面）の南側にサブレンチを設定して下部底面の確認を実施した後に精査を再開した。南側土層用ベルト（B-B'断面）の南側は上部床面が不明瞭であったため上部床面の検出は実施しなかった。その後の精査により、南端部には土坑状の落ち込みがあり、その影響により上部床面が不明瞭となっているものと判断された。SD002の精査終了後に排土搬出路として残しておいた本調査区東側の表土除去を行いSD004及びSB001・002が検出されたため精査を実施した。遺構精査完了後、平板測量による平面図の作成及び等高線図の作成、写真撮影を実施し、堀や溝などの危険箇所を埋戻し調査を完了した。

#### 3 基本層序（第4図）

今回の調査区の基本層序は、調査区が丘陵平坦面から斜面部に形成された段丘面であるため各平坦面によりおもむきが異なる。丘陵を形成する基盤層は、上位平坦面に層厚約2mの人頭大の円礫を含む未固結の砂泥層が認められる。その下部の固結した砂質シルト岩層が斜面全体に確認され山塊を形成している。基盤層上の土層は上位平坦面では層厚約0.15mの灰黄褐色シルトが形成されていたのみで、近年の耕作等によるものと判断した。中位平坦面では南側（山側）半分が沖積層と思われる灰白色シルト層で近世以前に河川の洪水により形成されたものであろう。北側（川側）半分が近世以降の整地土で上部に1~2層の整地層（耕作層）が形成され床土・現耕作土に至る。下位平坦面は山側に砂質シルト岩層、川側は砂及びシルト層の上に屋敷地とするための整地層が認められた。近世以降の曲流短絡（川廻し）等による河床低下を考慮するならば、それ以前は河川と考えられ、整地層下の砂層も河川による堆積物であろう。これにより、中位面下部の砂質シルト岩層上面及び下位面下部の砂質シルト岩層上面は旧河床と判断される。また、斜面部にはシルト層と基盤層である砂泥層及び砂質シルト岩層のブロックが堆積しており、上位の平坦面及び斜面から崩落したものと判断された。

注1 上総丘陵南部、上総丘陵東部の名称及び地形・地質の記述については、水谷武司 1997「第1章地形 第3節丘陵・山地」「千葉県の自然誌」本編2 千葉県の大地 県史41 千葉県 を参考にした。

2 千葉県市原郡教育会編 1916「市原郡誌」 千葉県市原郡役所

3 橋本文雄ほか 1955「重要文化財西願寺阿彌陀堂修理工事報告書」 重要文化財西願寺阿彌陀堂修理工事事務所

4 川戸 彰 1986「第二章・第六節・第四項 中世の市原文化」「市原市史」中巻 市原市

5 伊禮正雄 1986「第二章・第四節・第二項 上総一本桵と平之城」「市原市史」中巻 市原市

6 小高春雄 1992「城郭史におけるひとつの画期 -資料にみる地域の例から-」「千葉城郭研究」第2号 千葉城郭研究会

7 小高春雄 1999「市原の城」

8 周辺の各城跡については、小高春雄 1999「市原の城」 及び 小高春雄 2004「夷隅の城」 を参考にしたが、名称については、渡邊智信ほか 1999「千葉県埋蔵文化財分布地図(3) -千葉市・市原市・長生地区(改訂版)-」 千葉県教育委員会 を使用した。

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺構

#### 1 堀・溝

SD002(第6・7図、巻頭図版、図版3)

本調査区中央、4D - 71から5D - 63グリッドで検出された南北方向の堀である。全体が本調査区内におさまり、全長18.95m、深さ1.72mを測り、断面は上面幅3.30m、底面幅0.45m~0.75mの逆台形を呈し、いわゆる薬研堀に相当するものと判断された。底面から約0.3m上、深さ1.4m付近で中位の底面が認められた。中位底面は酸化鉄の沈着等により著しい硬化が認められ、一定期間その面を底面としていたものと判断された。この時期の断面形態は椀形を呈している。また、堀の南端の覆土は特にしまりがなく、底面付近に炭化物も認められ土坑状に埋め残されていたものと判断されたが、北側の堀の大半が埋め戻された時期との差はそれほどないものと判断される。覆土は古段階は基盤層のシルトや砂が堆積したもので比較的短期間に堆積したものとみられる。新段階は腐植土と思われる暗褐色土層が壁面に形成された後に基盤層ブロックを含む土砂により埋め戻されている。埋め戻された基盤層ブロックには固結したシルト層のブロックも見られ、熱により橙色に変色したものも散見された。

遺物は南端土坑内と思われる堀の東壁面からかわらけ3点(第10図1~3)、西側から瀬戸・美濃産陶器皿1点(第10図4)が出土した。

SD001-001b(第6・7図、図版3・4)

SD001は本調査区中央、4D - 80から5D - 81グリッド、SD002の西側に並行して検出された南北方向の溝である。両端は調査区外へと延びるものと思われ、南半斜面部では幅0.81m、深さ0.22m、北半では幅2.52m、深さ0.80mを測り、北半部で徐々に幅と深さを増している。また、調査範囲の関係で北側5D - 00グリッドで途切れ、4D - 80~90グリッドでは東壁の上端部のみを検出したに過ぎない。

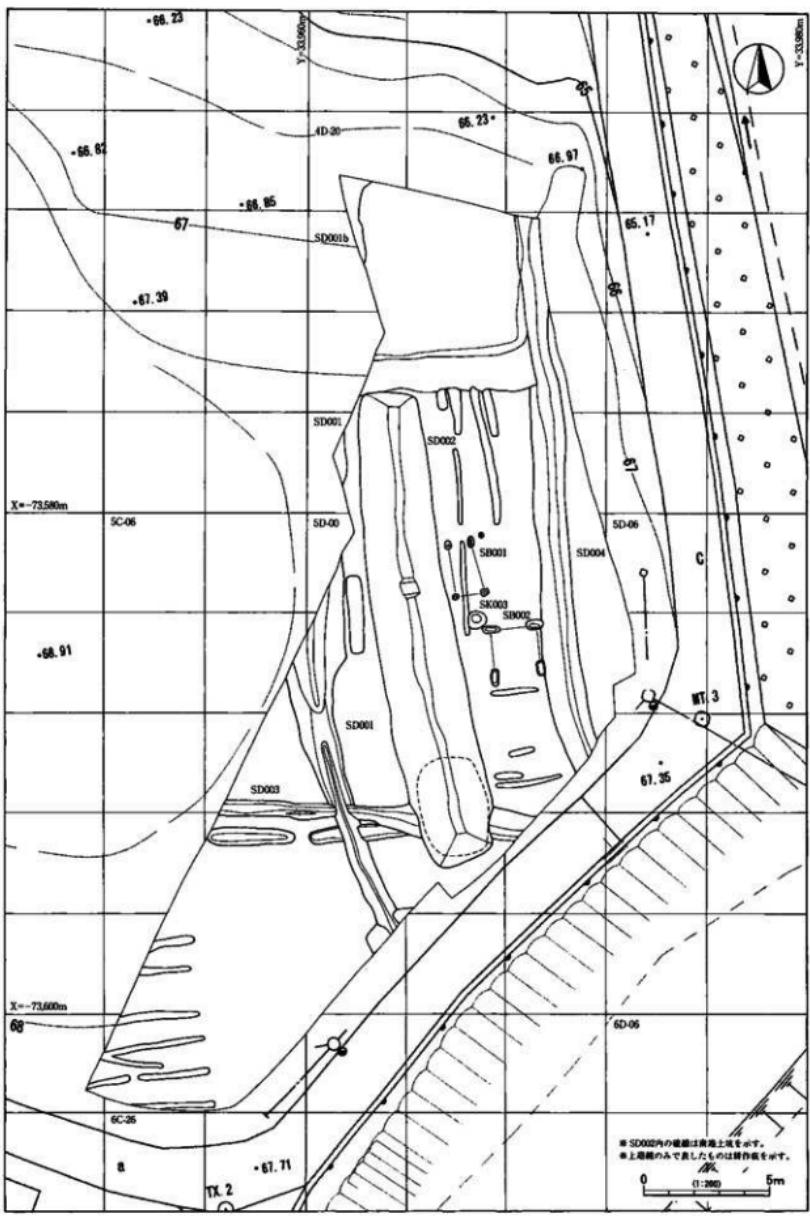
SD001bは本調査区の北西端、4D - 30~41グリッドで検出した溝の東壁の上端部と考えられる遺構である。覆土こそ異なるが、その位置からSD001と連続する可能性が高いものと判断し、SD001bの名称を付した。

SD003(第6・7図、図版3・5)

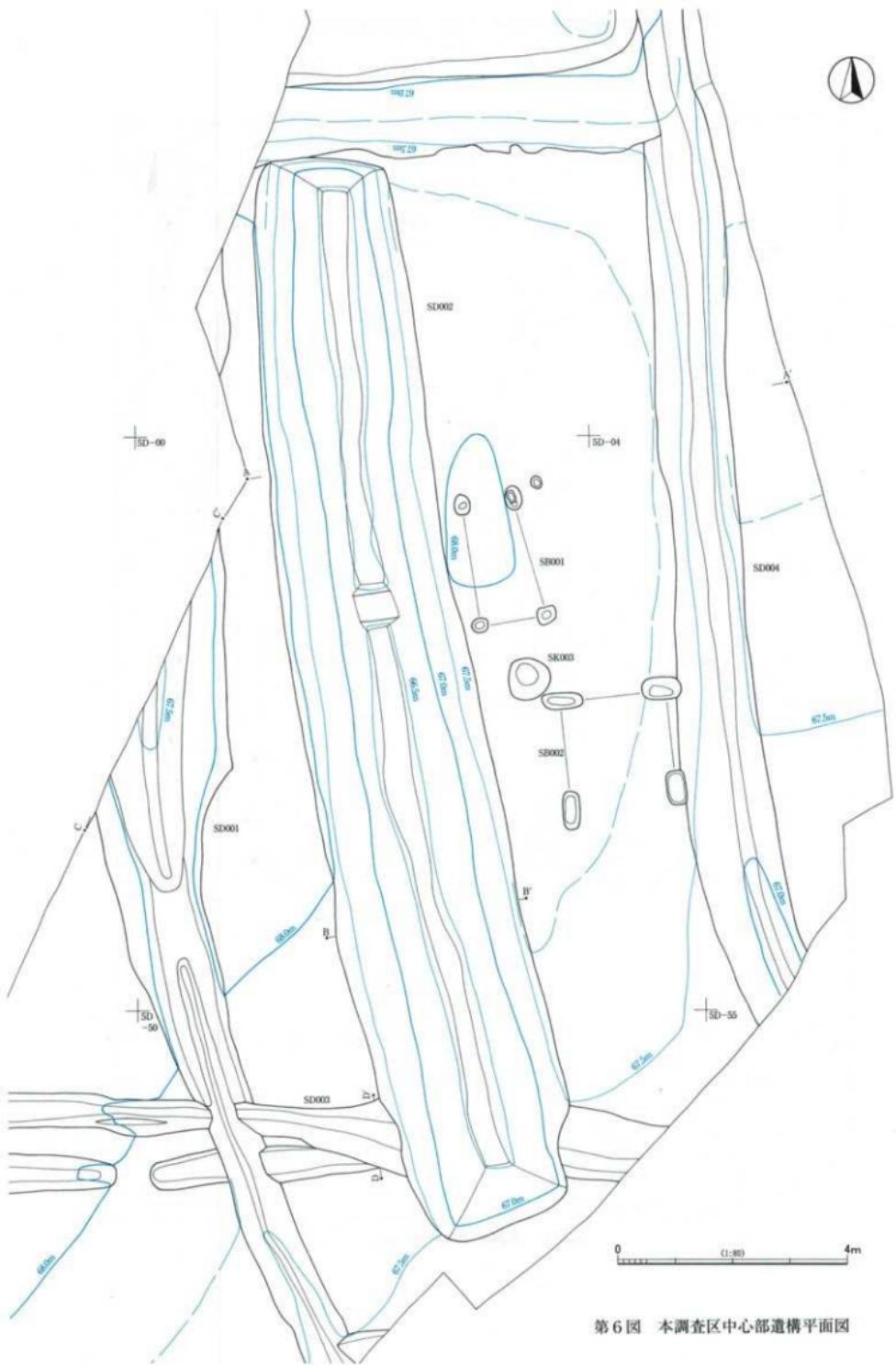
本調査区中央、5C - 58から5D - 64グリッド、SD001・SD002の南端を横切るように検出された東西方向の溝である。西側は2条に分かれ、北側が古く、南側が新しい。溝はSD002・SD001を切って造られている。

SD004(第6・7図、図版3・5)

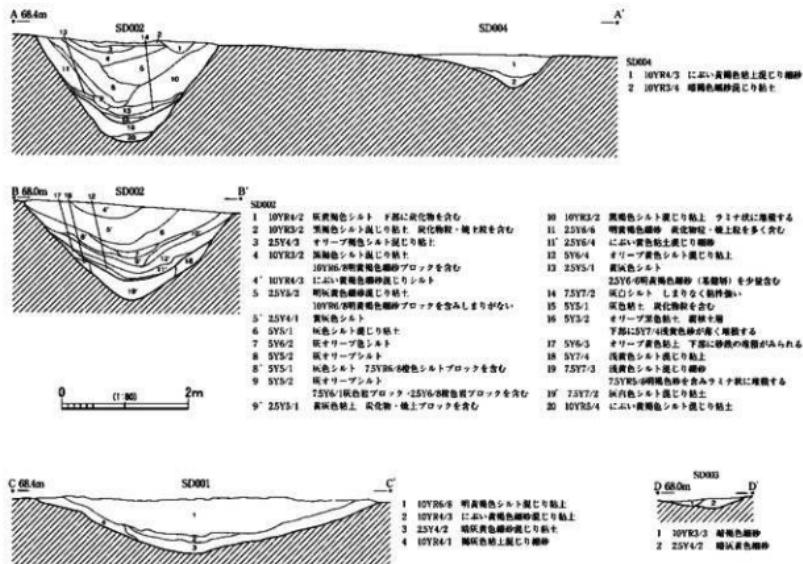
本調査区東縁、4D - 44から5D - 45グリッド、SD002の東側に並行して検出された南北方向の溝である。本調査区の北側、約1m低い段では東壁及び床面が僅かに残るのみであるが、北端では再び溝状に検出された。本調査区北側東縁は上位面から連続する土壌状の高まりが認められ、調査開始前に土壌の可能性が考えられたが、調査の結果、基盤層である砂泥層が掘り残されたものと判断された。おそらく、本調査区全体が平坦でSD004が溝状に掘られてあったものを、近・現代に溝の一部を利用して段状に掘り下げ畑地としたものと考えられる。



第5図 本調査区遺構分布図



第6図 本調査区中心部遺構平面図



第7図 堀・溝断面図

## 2 掘立柱建物跡

SB001(第8図、図版4)

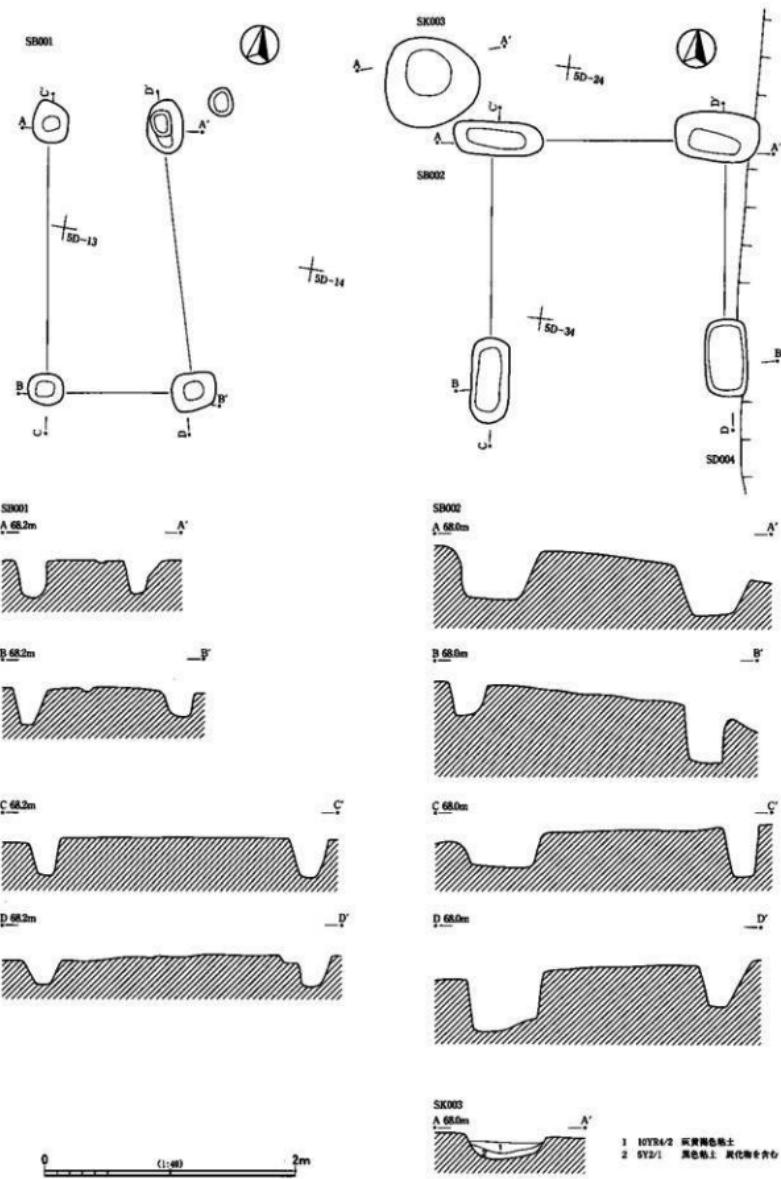
本調査区東側、5D-02~13グリッド、SD002の東側に検出された1間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴はわずかに長方形を呈しており、南側の柱穴は東西に長軸をとり、北側の柱穴は南北に長軸をとる。長軸方向に柱筋の通る南側柱穴を親柱、北側柱穴を控柱とする4本柱門の可能性も考えられ、この場合は南側が外側、北側が内側の可能性が高い。南側桁行(本柱間)1.18m、西側梁行(本柱-控柱間)2.10m、東側梁行(本柱-控柱間)2.16m、北側桁行(控柱間)0.90mを測る。覆土は柱痕跡と考えられる中央部が明褐色細砂、柱掘形埋土と考えられる周辺が明黄褐色細砂であった。北東控柱の東に小柱穴が検出され、覆土から本掘立柱建物跡に付随する柱穴の可能性が高い。

いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

SB002(第8図、図版4)

本調査区東側、5D-23~34グリッド、SD002とSD004の間、SB001の南東側に検出された1間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴は長方形を呈し、北側の柱穴は東西に長軸をとり、南側の柱穴は南北に長軸をとる。北側柱穴を親柱、南側柱穴を控柱とする4本柱門の可能性も考えられ、この場合は北側が外側、南側が内側の可能性が高い。北側桁行(本柱間)1.85m、西側梁行(本柱-控柱間)1.90m、東側梁行(本柱-控柱間)1.70m、北側桁行(控柱間)1.87mを測り、正方形の平面形態を呈する。覆土は全体が暗褐色細砂混じり粘土であった。

遺物は南東隅柱穴から近世肥前磁器1点が出土しているが小片のため図示していない。



第8図 SB001, SB002, SK003平面・断面図

### 3 土坑

#### SK003(第8図)

本調査区中央、5D-13~23グリッド、SD002の東側、SB001とSB002の間に検出された土坑である。径0.74mの円形を呈し、深さ0.20mを測る皿状の断面を呈する。底面はSD020の中位底面と同様に硬くしまる。覆土は上層が基盤層を含む灰黄褐色粘土、下層が黒色粘土である。底面直上に炭化物粒がみられ、土坑内で火が焚かれたものと判断される。覆土や底面の状況からSD002の新段階に伴う可能性が高い。

遺物は出土していない。

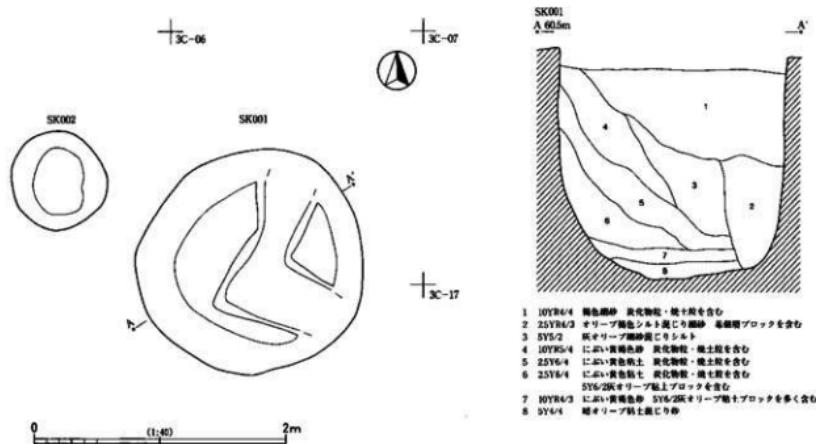
#### SK001(第9図、図版6)

2・3トレンチ拡張区、3C-05~16グリッドで検出された土坑である。径1.82mの円形を呈し、深さ1.73mを測る。北東壁と南東壁は軟弱で横穴が掘られていたものと判断され、底面はL字形の溝状を呈し、両端部は軟弱な壁面へと続いている。近世以降の所産と考えられたため詳細な調査は実施しなかったが、北東壁の横穴は斜面へ開口し、南東壁の横穴は等高線に並行して掘られていた可能性が高い。底面付近の覆土は粘土を含む砂であり水が流れている可能性が高い。下部の斜面にも認められる利水のための隧道を掘削するための豊坑と考えたい。

#### SK002(第9図、図版6)

2・3トレンチ拡張区、3C-05グリッド、SK001の北西に検出された土坑である。径0.75mの円形を呈し、深さ0.18mを測る皿状の断面を呈する。

遺物は近世肥前産白磁小杯(第10図5)と寛永通寶(新寛永)9点(第11図)、小ぶりではあるが燧石と思われる石製品1点(第12図4)が出土している。SK001が利水施設の可能性が高いことから、それに伴う祭祀遺構の可能性を考えたい。



第9図 SK001, SK002 平面・断面図

## 第2節 遺物

### 1 土器 (第10図、図版6、第1表)

第10図1～3はSD002堀内南端土坑から出土したかわらけである。1は小さめの底部から緩やかに内湾して起ち上がり、口縁部を僅かに外反して収める。底部には左廻りの回転糸切り痕が見られる。底部周縁にはヌタ痕も見られ、その分が僅かな柱状高台風に見え、体部下端の調整も難くなっている。底部が厚いのに対し、体部はやや薄く作られる。2は大きめの底部から体部下端が内湾気味に起ち上がり、直線的にハ字状に開く逆台形の断面形態を呈する。器壁は全体的に厚い。底部には僅かに回転糸切り痕が認められ、左廻りであろう。焼成が悪いのか器面の剥落が著しい。3は1・2に比して小ぶりである。体部が直線的にハ字状に開く逆台形を呈し、器壁が全体的に厚い点は2に近い。底部には左廻りの回転糸切り痕が見られ、体部下端の段が高さ0.3cmの柱状高台風に見られる。既調査の城跡出土のかわらけとの比較から、2が16世紀前半、1・3が16世紀後半のものであろう<sup>1)</sup>。第10図4はSD002堀内南端土坑から出土した瀬戸美濃産陶器灰釉丸皿である。体部から口縁部にかけての破片で3点のうち2点が接合した。両面に灰釉が施される。底部を欠くため詳細な時期は不明であるが、瀬戸大窯期の所産と考えられる<sup>2)</sup>。第10図5はSK002土坑から出土した肥前産白磁小杯である。体部外面下半に回転ヘラ削りが施され、高台も削り出し高台である。高台疊付の釉が削り取られ、砂目が僅かに認められる。近世中頃のものであろう。第10図6はSD001溝から出土した瀬戸美濃産陶器皿の底部片である。内外面に釉が認められないことから縁釉皿であろう。内面は使用により平滑になっており、底部外面には回転糸切り痕が見られる。第10図7は2トレンチ溝内から出土した瀬戸美濃産擂鉢の口縁部片である。端部を欠損するがコ字状に内湾する口縁は特徴的で、錫釉が施される。6・7は古瀬戸後期15世紀後半のものであろう<sup>3)</sup>。第10図8・9は繩文土器である。8はSK001から出土した早期条痕紋系土器の口縁部片である。摩滅が著しいが内外面に横方向の貝殻条痕紋が認められ、く字状に屈曲する段を有し、口縁部に押し引き沈線紋の痕跡も認められることから茅山下層式の可能性が高い。9は中期加曾利E式土器の胴部片であろう。

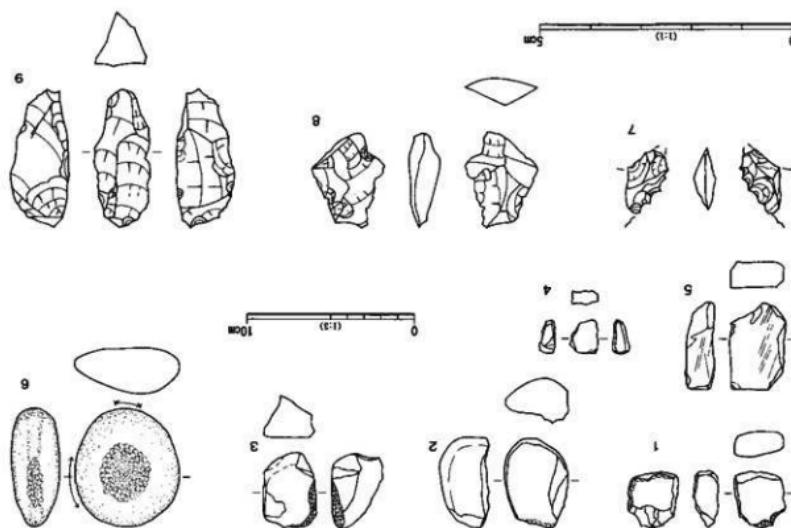
### 2 銭貨 (第11図、図版6、第2表)

第11図1～9はSK002土坑から出土した銭貨である。いずれも寛永通寶である。破片のものや癒着のため未確認のものを除きすべて新寛永である。1・2は背面に文の字が施された文銭である。4は調査時に一部欠失した。5～9は癒着して出土し、6は3点癒着した状態の表面である。7の銭貨の向きが不明であるが、その他のものは表面が同一方向である。

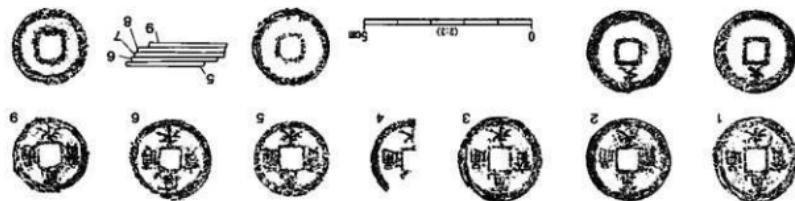
### 3 石製品・石器 (第12図、図版6、第3表)

第12図1～3は燧石である。1・2はSD002堀、3はSD001溝から出土した。4はSK003土坑から銭貨とともに出土したもので燧石の剥片の可能性もある。石材は1がチャート、2～4が石英である。第12図5は2トレンチから出土した砥石である。石材は流紋岩である。第12図6～9は石器及びその未製品である。6・7がSD001、8がSD003、9がSD001bといずれも溝の覆土から出土しており、溝の埋戻し時や埋没過程で周囲の土に含まれていたものが混入したものと考えられる。6は叩き石である。表面に顕著な敲打痕、左端面と下端面に僅かな敲打痕が認められる。石材は砂岩である。7・8は石鎚の破片である。7は無茎鎚の基部と考えられ、全体に押圧剥離が認められる。8是有茎鎚であるが、押圧剥離が僅かであり未製品と判断される。9は調整痕のある剥片で石鎚の未製品の可能性もある。石材はいすれも黒曜石である。

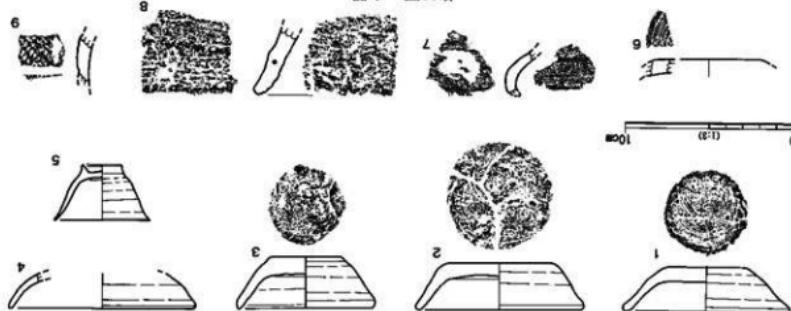
第12圖 石器・石器



第11圖 銅器



第10圖 土器



注1 既調査遺跡出土のかわらけとの比較は、以下の報告書等を参考にした。

- a 牛房茂行ほか 1984「真里谷城跡」木更津市教育委員会
- b 梁瀬裕一ほか 2004「中世の一宮」一宮町教育委員会
- c 鳴田浩司 2000「第3章 出土遺物について」「千葉県文化財センター研究紀要」20 財団法人千葉県文化財センター

2 藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」「財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要」第10輯  
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

3 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群II - 古瀬戸後期様式の編年 - 」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」X 瀬戸市歴史民俗資料館

第1表 掘載土器観察表

件番号	遺物番号 (出土位置)	遺物番号	種別	器種	遺存状	計測値(cm, g)	性 法			胎 土	色 調	焼成
							部位	底部厚	外 壁 厚	内 部 厚		
第10回 1	SD002	7	かわらけ	杯	口縁～ 体部	70%	9.6 47 2.8	1.0 0.1 65.7	Rナデ Rナデ・底部ナデ R系切り無調整	○ △ ○	10YR7/4 25Y7/4 75YR5/6	○
第10回 2	SD002	6	かわらけ	杯	口縁～ 体部	95%	9.5 61 2.7	0.7 0.1 102.4	Rナデ Rナデ・底部ナデ R系切り無調整	△ ○ ○	25YR6/6 5YR6/6 75YR7/6	△
第10回 3	SD002	34. (5)	かわらけ	杯	口縁～ 体部	80%	8.0 4.4 3.1	1.1 0.3 58.5	Rナデ Rナデ・底部ナデ R系切り無調整	○ ○ △	5YR6/8 75YR7/6 75YR7/6	○
第10回 4	SD002	8.10. (9)	陶器	皿	口縁	25%	10.8 - - 12.0	- - -	施釉, Rナデ 施釉, Rナデ 施釉, Rナデ	○ - -	長石较少 7.5Y7/2 7.5Y7/1	○
第10回 5	SK002	2	磁器	小杯	口縁～ 体部	100%	5.5 23 3.3	0.4 0.5 28.0	施釉, Rナデ・Rヘラ削り 施釉, Rナデ 施釉, Rナデ	○ - -	10GY8/1 7.5GY8/1 N8/0	○
第10回 6	SD001	7	陶器	皿	底部	-	- - - 4.3	- - -	不明 R系切り無調整	○ - -	25Y8/7 5Y8/2 25Y8/6	○
第10回 7	2トレンチ	2	陶器	擦痕	口縁部	-	- - - 11.1	- - -	Rナデ, Rヘラ削り Rナデ	○ ○ -	SP3/1 SPB3/1 25Y8/3	○
第10回 8	SK001	1	繩文土器	深鉢	口縁部	-	- - - 38.3	- - -	貝殻条痕 貝殻条痕	▲ - -	圓錐	5YR5/6 7.5YR2/1 N15/0
第10回 9	SD003	2	繩文土器	深鉢	胴部	-	- - - 10.5	- - -	繩文 沈維 ナデ	○ ○ △ △	5YR6/8 7.5YR4/2 5YR2/1	○

第2表 掘載鏡貨観察表

件番号	遺物名	遺物番号	銘種	書体	款	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内縁外径(mm)	内縁内径(mm)	外縁厚 (mm)	内縁厚 (mm)	量 (g)	備考			
第11回 1	SK002 2	寛永通寶	真書	対読	25.35	25.31	19.86	19.96	7.43	7.32	5.93	5.84	1.30	0.75	2.70	背面「文」
第11回 2	SK002 3	寛永通寶	真書	対読	25.26	25.46	19.80	19.88	7.66	7.35	5.98	5.95	1.30	0.63	2.71	背面「文」
第11回 3	SK002 3	寛永通寶	真書	対読	26.20	29.97	20.52	20.38	7.96	7.42	5.86	5.66	1.53	0.89	3.13	
第11回 4	SK002 3	寛永通寶	真書	対読	-	-	-	-	7.51	-	5.89	-	1.29	0.69	[114]	1/3遺存
第11回 5	SK002 4	寛永通寶	真書	対読	27.97	23.16	18.21	18.29	8.33	8.30	6.40	6.37	1.28	0.90	2.16	
第11回 6	SK002 4	寛永通寶	真書	対読	25.19	24.92	19.78	19.28	7.62	7.01	5.89	5.88	1.44	-	[9.27]	3点発見
第11回 7	SK002 4	-	-	-	25.62	25.61	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
第11回 8	SK002 4	-	-	-	24.01	24.12	-	-	-	-	-	-	-	-		
第11回 9	SK002 4	寛永通寶	真書	対読	23.05	23.22	18.87	18.49	7.90	7.82	6.75	6.28	1.29	0.82	2.15	

第3表 掘載石製品・石器観察表

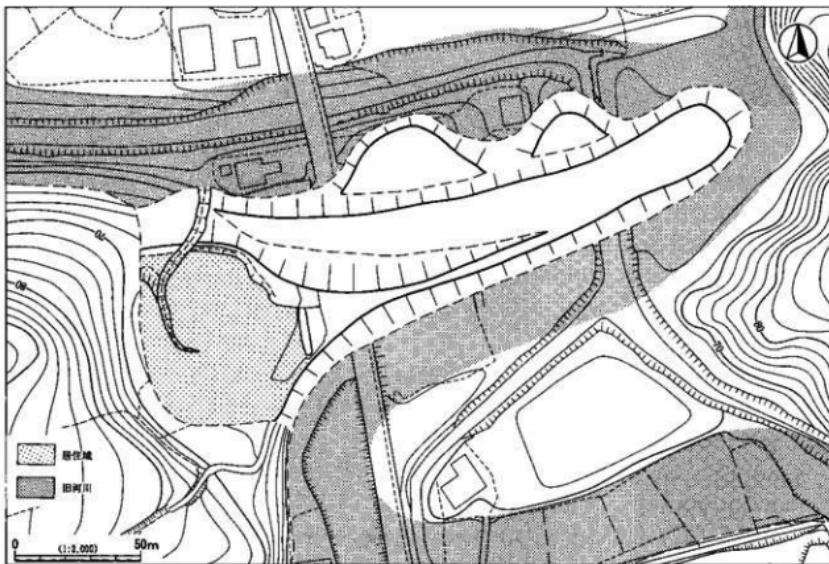
件番号	遺物名	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
第12回 1	SD002	12	礫石	チャート	33.15	28.83	14.35	20.25	
第12回 2	SD002	12	礫石	石英	53.58	36.93	27.18	69.57	
第12回 3	SD001	1	礫石	石英	43.72	31.43	31.90	48.01	
第12回 4	SK002	5.8	石英	石英	19.38	15.16	9.64	3.79	礫石?
第12回 5	2トレンチ	1	礫石	流紋岩	51.85	31.45	15.78	36.22	
第12回 6	SD001	1	叩き石	砂岩	69.40	61.18	27.57	16.53	
第12回 7	SD001	3	石巖	黒曜石	12.79	8.43	3.70	0.25	
第12回 8	SD003	4	石巖	黒曜石	18.69	14.23	5.87	1.31	
第12回 9	SD001b	2	R-I	黒曜石	26.81	11.55	11.28	3.21	石錐?

## 第3章 まとめ

今回の調査地は前述のように平蔵川に面する平蔵城根小屋部の上位から下位の平坦面を横断している。根小屋部上位面ではSD002堀が検出され、城として活用されたことが明らかとなった。しかしながら、中位面は北東半が後世の耕作地の拡張に伴って埋められており、狹小な腰曲輪として活用された可能性は考えられるものの明確な城に関連する遺構は見あたらない。下位面は確認調査で検出したSK001やSK002が近世の利水関連遺構と考えられ、中世には蛇行する平蔵川の河床であった可能性が高いことが判った。これらの成果から平蔵城根小屋部を復元すると以下のようなことが言えよう。

1. 本調査を実施した標高約68mの上位面は中世に城として活用されている。
2. 上位面で検出した堀は根小屋部の南側面を東に向かって延びる尾根を切断するような位置に造られており、中世に存在したものと考えられる。
3. 堀の西側には広い平坦面が展開しており、根小屋部の中で最も屋敷地や居館などの居住域として活用された可能性が高い。
4. 標高約61mの中位面は今回の調査区では狭小な腰曲輪の可能性が考えられるが明瞭な城郭遺構は検出されなかった。また、国道の東側に展開する同標高の平坦面もそれほど広いものではなく、小規模な建物の存在した可能性が考えられる程度である。
5. 北側の平蔵川に面する標高約56mの下位面は中世には旧河道であったものと判断される。なお、根小屋部北東側に展開する標高約58mの平坦面は旧河道内もしくは川岸であった可能性が考えられる。
6. 川廻しによる尾根先端部の切断を考慮するならば、平蔵城根小屋部と平蔵川を挟んで対峙する標高約58mの微高地も平蔵城の範囲に含む必要がある。

以上が今回の調査地、平蔵城根小屋部の調査成果をまとめたものであるが、根小屋部に限定したものであり、平蔵城全体での位置付けも必要となろう。平蔵城は従来の研究<sup>1)</sup>でその城郭構造により15世紀後半から16世紀前半の城と考えられており、平蔵城の北側に位置する城部田城を16世紀後半の城として、平蔵城から城部田城への移行が考えられている。城部田城の時期については大堀切や虎口などの城郭遺構が良く残されており、その時期については大方の同意を得られるものであろう。しかしながら、平蔵城については山頂部に認められる数段の平場と今回調査の対象となつた平蔵川に面する根小屋部の平坦面が活用されたものと考えられるのみで堀切などの明確な城郭遺構が確認されず、その時期は決して定まったものではなかった。今回の調査で検出されたSD002堀により、当地が確實に城として機能していたことが証明された。このSD002堀は西側の平坦面と東に連なる尾根を分断するように横断するが、堀の南側を狭く、北側を広く平坦面を残しており、北側を入口とした可能性が高い。一般的に尾根を分断する堀については大堀切を別にして、片側を土橋状に残す堀が戦国時代末期の上総・安房地域の城跡に散見されることから、SD002堀も概ね16世紀代の所産と判断されよう。次に、堀南端から出土した遺物については、瀬戸美濃産灰釉丸皿が底部を欠き詳細な時期の決定が困難であるものの大窯期（1480～1590）の所産と考えられる。



第13図 平蔵城根小屋部復元概念図

かわらけ杯についても周辺城跡出土のかわらけとの比較から16世紀中葉から後葉の年代が推定される。築造、廃絶、廃絶後の最終的な埋戻しの各期間は第2章でも述べたように廃絶から埋戻しまでの期間がある程度あったものと考えられるが、この期間を考慮に入れて16世紀中葉頃に築造されたものと判断することが妥当であろう。よって、今回の調査で検出された平蔵城根小屋部の堀は16世紀中頃の比較的短期間に使用された可能性が高いものと判断される。なお、小片ではあるが15世紀後半の瀬戸美濃産陶器が出土し、僅かながらではあるがその時期の生活痕跡が認められた点は、従来から言われている築城期を裏付ける資料とも考えられるが、明確な遺構の検出には至らなかったため未だ不明と言わざるを得ない。

前述したように城部田城が16世紀後半の城として位置づけられており、平蔵城から城部田城への移行が推定されている点を今回の調査成果から考えるならば、平蔵城の消長は城部田城の消長と一部重複するか、もしくは平蔵城から城部田城に間断なく移行した可能性が高い。但し、今回の調査地での成果が平蔵城全体の消長を表すものであるとの仮定の上での評価であり、今回の調査地が平蔵城全体から見ればまさに氷山の一角であり、城部田城も含めて今後の発掘調査に期待したい。

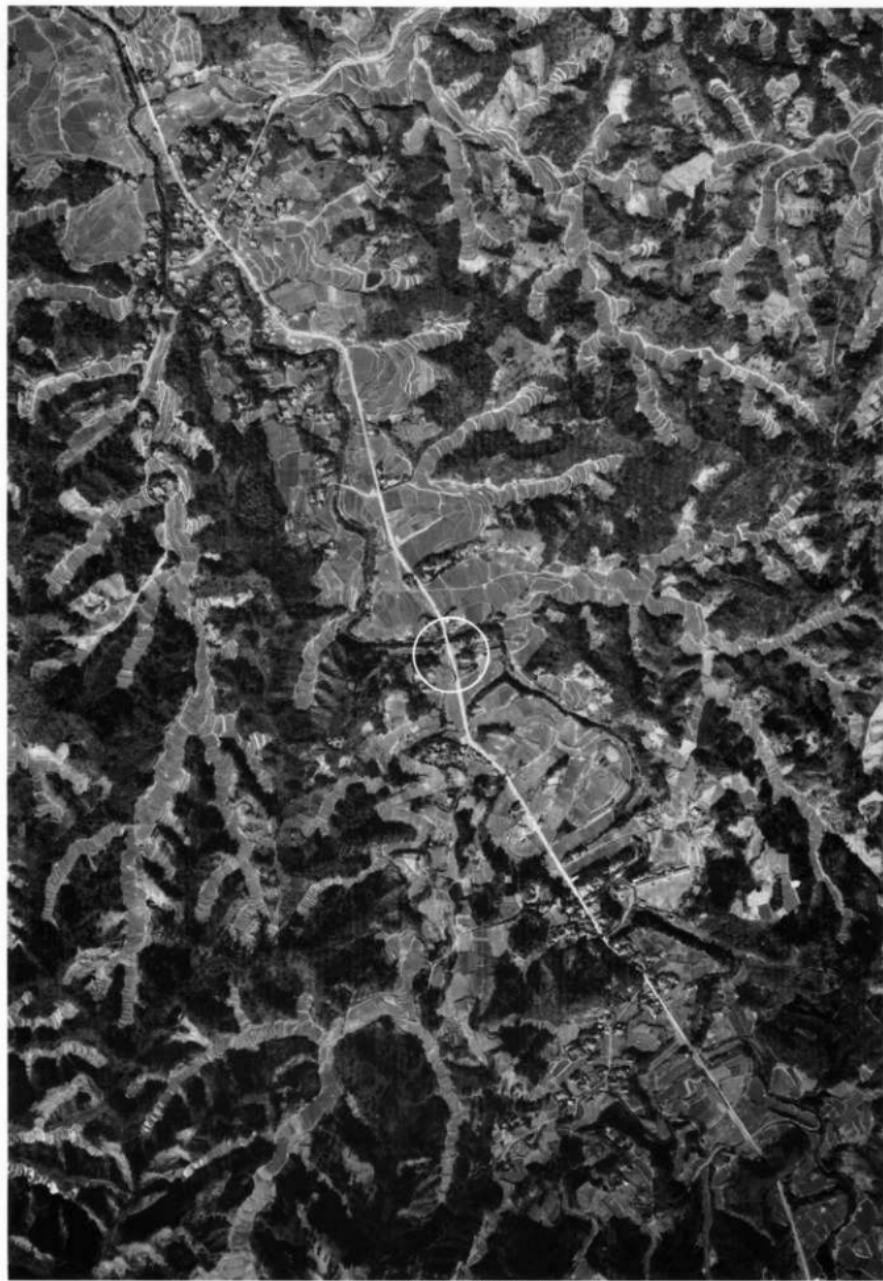
注1 落合忠一ほか 1980「日本城郭大系」第6巻 千葉・神奈川 株式会社新人物往来社

小高春雄 1992「城郭史におけるひとつの画期－史料にみる地域の例から－」『千葉城郭研究』第2号

千葉城郭研究会

小高春雄 1999『市原の城』

# 写 真 図 版



1. 調査地周辺の航空写真

(1 ≈ 10,000)



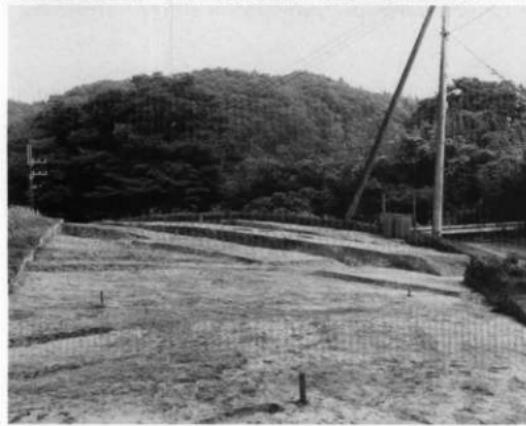
1. 調査前遠景（北から）



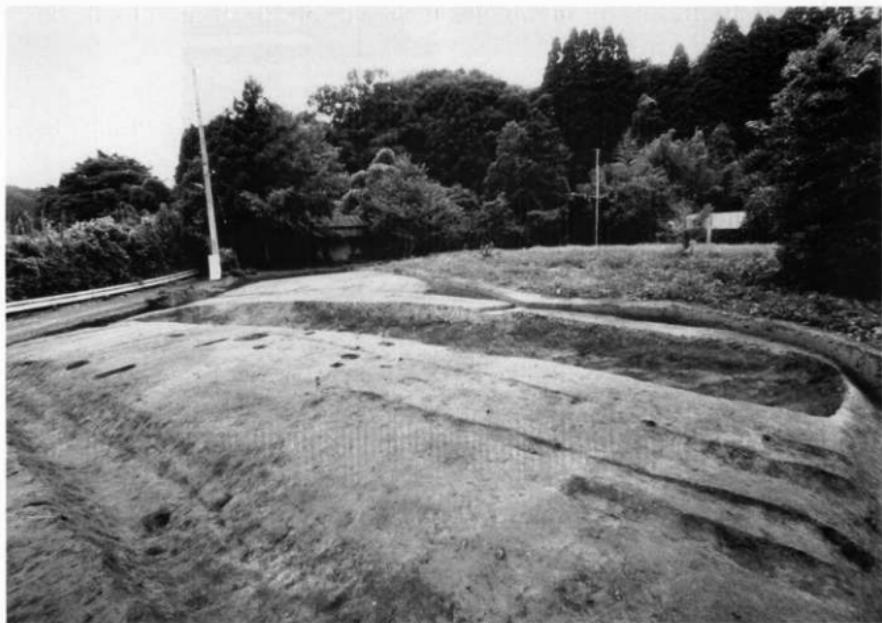
2. 調査前遠景（南から）



3. 本調査区南半部調査前風景（南西から）



4. 本調査区南半部完掘状況（南西から）



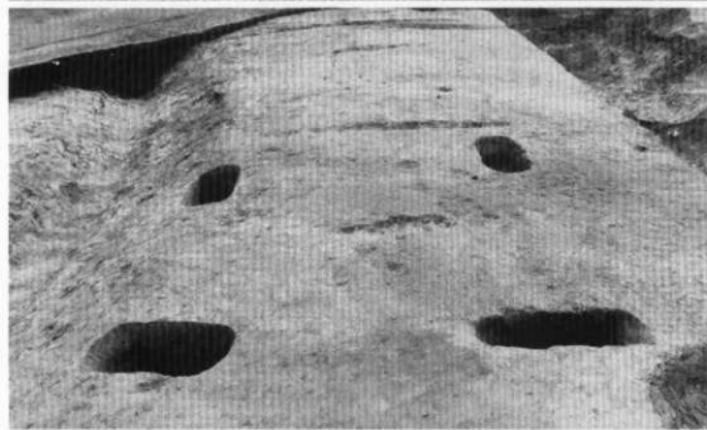
1. SD002 完掘状況（北東から）



2. SD001~004 完掘状況（南から）



1. SB001 完掘状況  
(東から)



2. SB002 完掘状況  
(北から)



3. SD001 C-C' 断面  
(南東から)



1. SD003 D-D' 断面（東から）



2. SD004 A-A' 断面（南から）



3. 2 トレンチ完掘状況（北から）



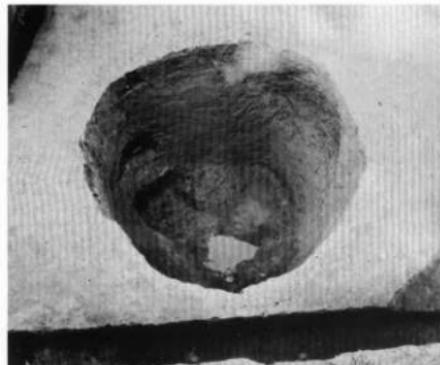
5. 4 トレンチ完掘状況（北から）



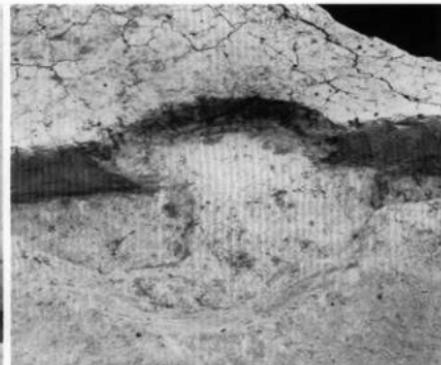
4. 2 トレンチ上半断面（北東から）



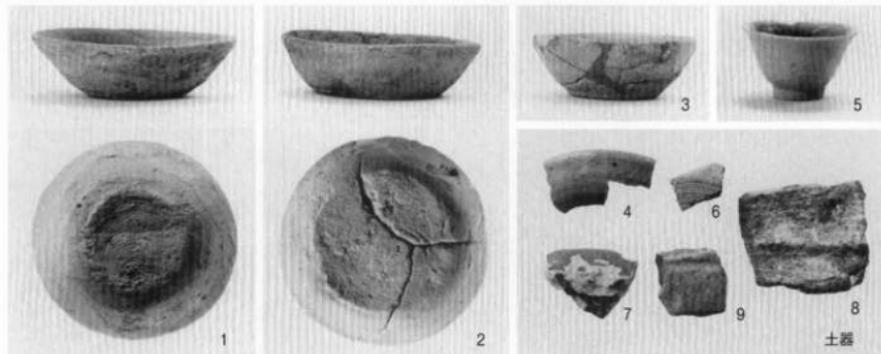
6. 4 トレンチ上半断面（北東から）



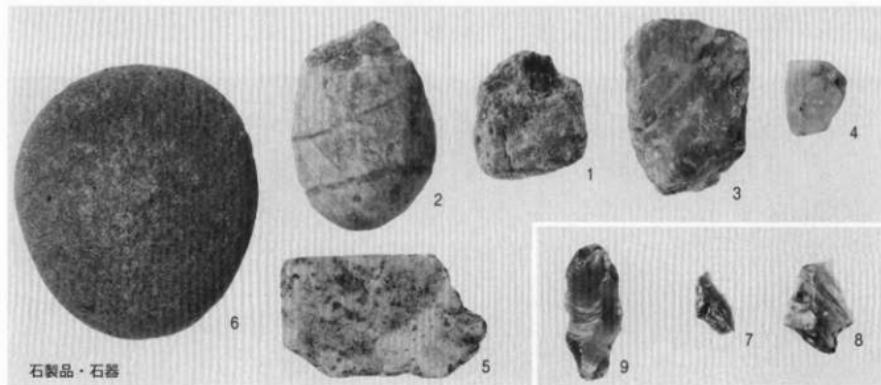
1. SK001 完掘状況（北西から）



2. SK002 完掘状況（北西から）



土器



石製品・石器

3. 出土遺物

## 報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第588集

市原市 平蔵城跡

-国道297号(平蔵地区)道路改良事業埋蔵文化財調査報告書-

平成20年1月28日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発 行 千葉県 県土整備部  
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県教育振興財団  
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 エリート情報社[印刷出版局]  
成田市東和田415番地10